夜明け前より瑠璃色な

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック

2009年春号

AUGUST

OHB-090505

P R E F A C E ― ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。
何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

2009 年 2 月 27 日には『夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle-』を発売致しました。
お買い上げ頂いた皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

開発室には、現在アンケート葉書が山のように届いております。
温かい激励に舞い上がり、厳しい叱咤に身を引き締めながら、一通一通開発スタッフが拝見しています。
ソフトは買ったもののまだアンケート葉書を送っていないという方がいらっしゃいましたら、今後の作品作りの糧とさせて頂きますので、
ご記入の上ご投函頂ければ幸いです。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみいただければと思います。

2009 年春　オーガスト / ARIA 拝

CONTENTS

3 …… 夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle- マンガ
例えば夕焼けの中で

7 …… 『FORTUNE ARTERIAL』ショートストーリー
一夜物語

10 …… スタッフ対談

11 …… あとがき

例えば夕焼けの中で
べっかんこう
ふぅ
あ、ここにいたんだ
ああ……
悩み事、あるんでしょ？
どうしてわかったんだ？
だって、最近元気ないじゃない
相談なら、いつでも受け付けてるわよ？

言った方が楽になるって、真理だと思わない？

いや、シンシアに言えるようなことじゃないから

そうかな？

そうよ

……わかった

ぐっ

実は俺……シンシアのことが好きなんだっ

そう……なんだ

あーあ、心配して損しちゃった

損ってなんだよ

だって達哉の悩みは、最初から解決してたようなものだもの……

え？

わかりなさいよ……バカ

……と、こんな感じでどうだろう？

私たちが一緒に学園に通っていたら…ねぇ

なんか、すご～く頭悪そうなカップルなんだけど

いいじゃないか、もしもの話なんだし

……

そうね。悪くないわね……もしもの話なんだし

なら、せっかくだし、もうちょっと羽目を外した想像してみよっか

おしまい

FORTUNE ARTERIAL Short Story

一夜物語

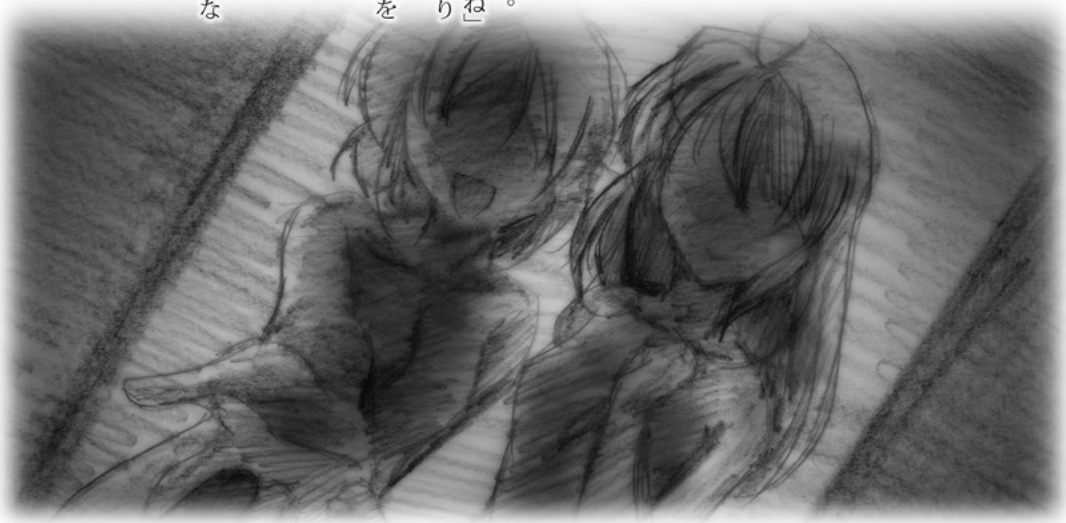
安西秀明

夢を見ていた。
俺はまだ、小さな子供のようだ。
ここは、押し入れだろうか。
暗くて寂しい場所。
俺の側には誰もいなくて。
俺の側には誰もいなくてもいいと強がっていて。
ずっと、ひとり。
わずかに、扉が開いて光が差し込んだ。
ぼんやりと、二つの顔が見える。
誰だろう？
よく似た2人の女の子だ。
髪の短い方の女の子が、口を開く。
——大丈夫だよ。
そう言って、俺に手を伸ばす。
体が動かない。
手を取りたいのに。
おかしい。
自分の体を見ると、黒く冷たい手が俺に絡みついていた。
必死に抵抗するものの、体が重くて動かない。
息苦しい。
このまま窒息してしまうのかと思ったところで——
「はぁ……はぁ……」
目を開けると、そこは暗い俺の部屋。
夢は終わってくれたようだ。
それなのに——
——体が、動かない。
「え……？」

鉛でも載っているかのように、重い。
生暖かい風が、頬を撫でていく。
おかしい。
部屋の中なのになんで風が？
まさかそういった類の現象なのか？
吸血鬼がいるのだ。
何があっても不思議じゃない。
俺はどうなるのだろうか。
背筋が凍りつく。
動けないまま、思考が明確になってくる。
重い。
重い重い重い。
あばらの上に何か載っている。
人のような黒い影。
物言いたげに、こちらをじっと見つめている。
「……何してるんですか、かなでさん」

◆

生暖かい風の吹き込む扉を閉め、お茶を淹れた。
「やーやー、お茶まで出してもらってすみませんね」
かなでさんは、テーブルの向かいにぺたりと座り込んで言った。
愛らしい笑顔を俺に向け、小さな両手でカップを持っている。
純粋な笑みを見ると、心が和む。
……憎めない人だ。
横目で時計を見ると午前2時だった。
草木もお休みになる時間だ。
なぜこんな深夜に、二人でお茶会をしなければならないのだろう。
……今ならちょっと憎めるかもしれない。
「……で、何してたんですか」
「こーヘーの上に座ってたの」
「それは知ってます」
「うん。知ってるよね」
「理由を聞いてるんです」

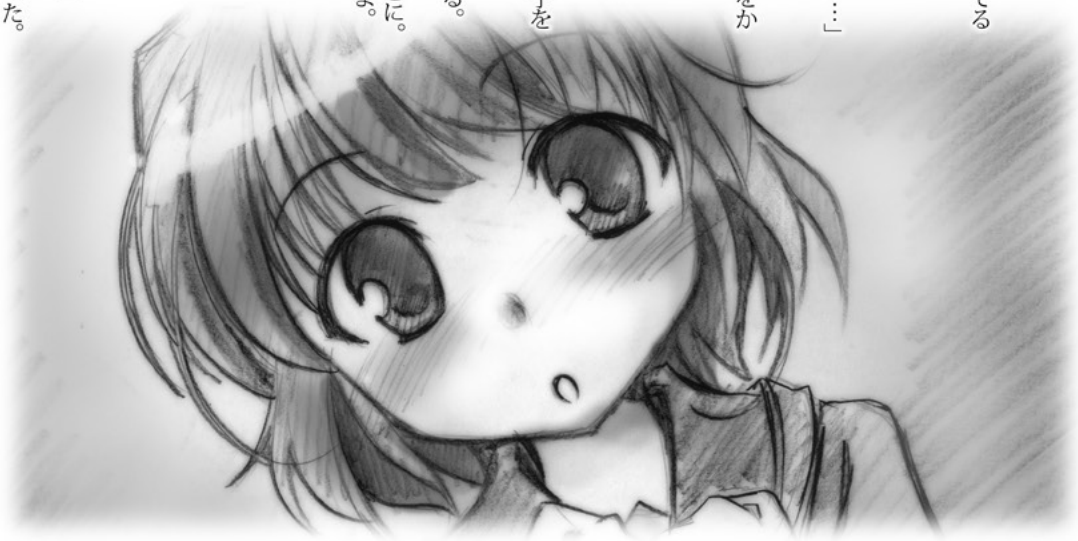


「ふぅむぅ」
可愛らしく鼻を鳴らして、首をかしげる。
癖のあるふわふわとした髪が揺れた。
「話すと長くもならないし短くもないよ？」
「丁度いい長さなら、とっとと話して下さい」
「あのね、寝てるこーへーを見に来たら、うなされてたの」
「はあ」
ツッコミどころが満載だが、続きを聞くために我慢した。
「だから上にのっかったの」
「何が『だから』なんですかっ」
ぴしっと、我慢できずかなでさんにツッコミをいれる。
「っ！？」
肩に手を当てるつもりが、少し微妙な位置にヒット。
野球で言うならアウトコースいっぱい。
副会長が相手だったら『どこ触ってるのよっ！（どこんっ）』とギリギリ判定される場所だ。
「……」
「……」
二人で固まってしまった。
制服よりも薄い部屋着の布越しに、かなでさんの体温を感じてしまう。
「こーへー、ツッコミが長いよ……？」
「あ、はい」
すごすごと手を引く。
話を戻そう。
「それで、なんで座ってたんですか」
「だ、だって、布団に入ったらまずいでしょう」
恥ずかしそうに言われた。
「わたし、風紀委員だし」
風紀委員が夜2時に他の部屋に来るのはどうなのか。
まったく話がかみ合ってない気がする。
ちょっと整理しよう。
「なぜ、上にのっかったり布団に入ったりしようと思ったんですか」
「だって、うなされてたから」
「余計にうなされましたが」
「じゃあ、どうしたらよかったの？」
「えーっと、例えばかなでさんがうなされてたら……」
「うん」
想像してみる。
頭を撫でたりとか。
なんか、それ、母親が子供にすることじゃないだろうか。
口にするのは恥ずかしいな。
……もしかして、かなでさんもそうだったのか？
照れ隠しで、ギャグっぽく俺の上に座ってたのか？
「……こーへーがね、寝言で言ってたの」
俺が考え込んでいると、かなでさんはぽつりと言った。
「どんなことを？」
「たぶん、こーへーが小さい頃のこと。わたしたちと離ればなれになった後のこと」
胸に、小さな痛みが走る。
少し苦い顔をしてしまったかもしれない。
「それで、寂しがってるんじゃないかって思って……」
心配そうな瞳に、覗き込まれる。
心を透かすような、曇りのない双眸。
それは、人と距離を置いてきた俺が苦手とする視線だ。
「だから、ほんとは添い寝のがいいかなって思ったんだけど、自主規制したんだよ」
照れ隠しじゃなくて、自主規制か。
ほんとは、添い寝したかったってことか……？
「今、寮にはほとんど生徒がいないでしょう？」
「連休ですからね」
「残ってる人は、みんな少なからず寂しがってると思うの」
わたしもそうだしね、とかなでさんは続けた。

「こんなときは、寮長としてみんなが楽しめる企画をやったほうがいいんだけど、今は勤務時間外だから」
「寮長に勤務時間はないような」
「いーの。今は自由時間。わたしの好きなようにする時間」
かなでさんは、俺に向かって両手を伸ばした。
何をしようと言うのだろう？
「最近手相の勉強を始めたアルよ」
「怪しすぎますよ」
「いいから」
かなでさんの両手が、俺の手を引き寄せた。
鼻がつきそうなくらい近づけて、俺の手のひらをまじまじと見つめる。
俺は諦めて、かなでさんの好きにさせた。
「ほうほう」
「何かわかりましたか？」
「きっといいことあるよ」
「はあ」
「この学院は、キミにとって幸運の場所」
そうだろうか。
「今はまだ、わたしに本音を言ってくれないことがあるけど」
そうだろうか。
「きっと、こーへーの壁が溶けちゃう時が来るの」
「はあ」
「わたしがそうするから」
もはや、占いじゃない。
「わたしが一番、寂しくなくしたいのは、こーへーなんだよ」
ぎゅっと俺の手を包み込んだ。
小さくて温かい手で。
「誰がなんと言おうと、そうするから」
だから、俺の部屋に来たのか？
もしかしたら、昼にそんな素振りを見せてしまったのかも知れない。
「でも、それは……」
「同情ってわけじゃないよ」
「……好意の押し売り」
「そう。そうだね」
そんなエゴの塊のようなことを真顔で言われてるのに。
……嫌じゃない。
不思議な人だ。
「でも、どうして俺なんですか？」
「だって、こーへーはわたしにとって特別な……」
当然でしょ、とでもいう風に俺の目を見た。
「特別な……？」
かなでさんは自分の言葉を繰り返して、小首をかしげた。
「……お、弟だから」
なぜか、少し頬を染めながら言った。
「ややっ！　もう深夜じゃないかっ」
「最初からそうですよ」
「じゃあね、こーへー。お邪魔しましたっ」
縞リスのように素早い動きで、ベランダの梯子を登っていく。
やれやれ。
一つため息をつき、俺はサッシを静かに閉める。
かなでさんは気づいているのだろうか。
俺が最近、このサッシに鍵をかけていないことに。
今までとは、もうとっくに変わってるんですよ。
誰かさんのお陰で。
多分、俺は今微笑んでいるのだと思う。

◆

数日後、また悪夢を見て目を覚ました。
俺の上にいる人影に抗議する。
「重いです、かなでさん」
「……寂しくない？」
「もう俺の上に鎮座するのはやめてください」
「じゃあ体育座りで」
寂しくはないが、睡眠時間も欲しいと思う俺だった。



べっかんこう(以下べ)：夜明けMCが発売されましたね。お買い上げ頂いた皆様、ありがとうございました。

榊原拓(以下榊)：楽しんで頂けていれば幸いです。アンケート葉書も沢山届いてますよ!

べ:さてMCでは新キャラのシンシアさんが登場しました。

榊:シンシアは当初どう受けとられるか不安だったのですが、ご好評を頂いているようでほっと胸をなで下ろしています。

べ:プレイすると判ると思うんですが、シンシアは設定自体にネタバレ要素があるので、発売前はインタビュー等でほとんど語ることができませんでした。クロニクルもほかしつつ書いてみたり。

榊:FAの伽耶ほどじゃないにしても、ちょっと辛かったですね。

べ:伽耶様はまだサブキャラでしたし。……あ、今FAのクロニクル見返してみたら伽耶様の伽の字も載ってない。

榊:伽耶は本当に情報を一切出しませんでした。FA のアンケート葉書の「好きなキャラ」欄にも名前が無いんです。だから、その他にマルをつけて(伽耶様)と書いて下さった方も多かったですよ。

べ:ありがたいですね。

榊:葉書といえば、今回のMCでは好きな水着を選んでもらう項目があるんですが、FAの体操服についての項目でブルマが強かったのと比べると、水着では旧スクがそこまで強くなかったり。

べ:授業に関係ないならビキニもいいな。

榊:ビキニ支持は強いですね。ワンピースも人気あります。まあ、キャラによって似合う水着ってのもありますが。

べ:小さな子ならプライベートスク水も良いですけど。

榊:ちなみにアンケート葉書は全部拝見してます。イラストを描いて下さってる方、なごんでます。ありがとうございます。

べ:――ところで、翠EDのスタッフロール絵は自分で描いておいてなんですがお気に入りです。シンシアが特に。

榊:トランペット可愛いですよね。って、シンシアルートクリア後に彼女が増えるのは隠し要素だったのでは? もういいのかな。

べ:気づいてない人はこの対談を読んで知ってもらえればと。トランペットシンシアがお気に入りなのは本当ですが。

榊:こちらはイベントとは違うんですが、菜月のブログは楽しげで良かったと思います。実際にプロモーションとして作ってみようかという案もあったんですが、残念ながら実現していません。

べ:カーボンじゃ「あとでスタッフが美味しく頂きました」ってわけにはいかないですしね。

榊:ああも見事なカーボンはなかなか作れないですよ(笑)

べ:菜月ブログといえば、菜月画の仁さんは僕が描いたんです。

榊:おお、あれは味がありましたね。

べ:手馴れた感じになりすぎてもなんだし、下手すぎるのもどうかという微妙なさじ加減が難しかったです。でも描いてて一番楽しかったかも。

榊:――さて次の作品ですが。そちらの作業はいかがですか。

べ:順調ですよ。

榊:こちらは脳味噌を絞ってる感じです。チーム内での議論も毎日激しくて。それでも今の時期が一番楽しいんですが。

べ:まぁ僕はこれからですから。

榊:んー、新作の話も、このタイミングだとなかなかできませんね。

べ:まだ言える事も少ないですからね。では、次回作をお楽しみに。

榊:頑張って作ってまーす。

2009.4.16 21:30 社内にて

POSTSCRIPT－あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

現在開発室では『夜明け前より瑠璃色な-Moonlight Cradle-』の次の作品の制作に取り組んでいます。
まだ詳しく書くことはできませんが、いくつかの新しい試みも取り入れて行こうということで、開発スタッフ一同盛り上がっているところです。

また、『FORTUNE ARTERIAL』の展開につきましても徐々に進めておりますので、こちらも発表できる時期が来るのをお待ち頂ければと思います。

それでは、今回はこの辺で。
今後とも、オーガスト/ARIAをよろしくお願い致します。

2009年春　オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック
2009年春号
※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

http://august-soft.com/
http://aria-soft.com/

夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness are round about him: righteousness and judgment are the habitation of his throne.
A fire goeth before him, and burneth up his enemies round about. His lightnings enlightened the world: the earth saw, and trembled.
The hills melted like wax at the presence of the Lord, at the presence of the Lord of the whole earth.
The heavens declare his righteousness, and all the people see his glory.

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック
2009年春号

AUGUST

(C)AUGUST All Rights Reserved.

OHB-090505